

## 大使コラム（2011年3月）

当国に着任してからはや4ヶ月近くが経ちました。皆様にはいかがお過ごしでしょうか。

2月のリスボンは、雨模様の日の合間に陽光がテージョ川に映える快晴の日も増えてきました。

昨年の日本・ポルトガル修好150周年の記念事業は、当館の承知するだけでも110件以上の行事が行われました。12月の天皇誕生日の式典で閉会式を行い、お陰様で多くの方々とともに行事の成功を祝し、今後の交流発展に決意を新たにすることができました。周年行事の報告は大使館のホームページにも掲載されていますので詳細には触れませんが、多くの関係者のご尽力やご協力に改めて深く感謝申し上げます。

大使館では本年も有意義な交流行事を進めたいと考えています。その一つとして、6月にリスボン市と共催で「ジャパン・デイ」を企画しており、詳細は決まり次第お伝えします。

国際的な文化交流を活発に行うには、民間団体の役割が重要なことは言うまでもありません。文化活動を商業ベースで行うことは、活動の持続性や多様性の確保の上からも有意義だと思えます。その上で大使館など公的機関の役割は、民間交流に活動の機会を提供し、また民間交流の形態になじみにくい事業を実施、支援していくことだと考えます。

2月末にリスボンで行われた「観光フェア」には、大使館やJETROだけでなく、マドリッドやパリ駐在の企業の方々にも参加をいただきました。このように、観光や文化を通じた相互理解に加えて経済面での交流促進をはかることも大使館の役目と考えています。

日ポ両国間には、既に8つの姉妹都市があります。九州の天草市も今年中にマデイラ島のフンシャル市と姉妹提携すべく準備を進めています。これら姉妹都市間の交流でも人や文化面の交流だけでなく、経済面での交流も推進できないか、大使館は関係者と話しをしつつ具体策を模索しています。

当国との交流には多様な可能性があると思いますが、双方の経済状況で実現が思うに任せないとしても、関係者の熱意と知恵を引き出し少しでも交流の実を挙げる

よう、引き続き努めていくつもりですので、皆様のご協力をお願い申し上げます。

他方、現在のポルトガルは、財政危機の問題が世界の注目を集めています。86年のEU加盟以降、この国は一定の外資導入やEUの支援でインフラ整備などに成果を上げました。しかし、マクロ経済の面では毎年1%程度の成長にとどまり、国際競争力や財政面での余裕が生まれないうまま、世界経済危機を迎えてしまいました。現在、増税と公務員給与の引き下げ、社会福祉の抑制など国民にとり前例のない厳しい財政措置を導入し、EUやIMFに頼らず、独自の努力で財政の立て直しを進めようとしています。かかる政策のとりあえずの評価は、予算の第1四半期の成果が分かる4月に出てくるとみられ、市場の反応も含めて当国は正念場を迎えつつあります。

EUの金融支援のための基金(EFSF)には、我が国も相当額の出資を表明しましたが、ギリシャやアイルランドのように当国もかかるEUの支援を求めざるを得なくなるのか、その場合には現在の少数与党、社会党のソクラテス政権の行方も含め、当面の動きから目が離せない状況になっています。

春のような陽気が続くリスボンでも、冬の雨にふるえる日もあります。皆様にはご自愛のほどをお祈り申し上げます。